

感であるだらう。高専生が古典を学習する意義はそこにある。

エンジニアを目指す学生たちは、ともすれば、新奇で簡便な価値に目を向け

がちである。しかし、一年次で古典作品に触れ、共通点・相違点を分析し、その背景を検討するという学習行動は、新たな視野を獲得する機会となる。長く読み継がれてきたものは、一定の普遍性を持ち、人々の共感を容易く得る」といふやきる巨大コンテンツである。これを活かし、昇華させることで、新たな価値が生み出される。そうした想像力・創造力が日本の文化・技術をつくり上げてきたのである。古いものは分断された存在ではなく、現代に連なる人間の所産である。こうした連續性を意識しつつ、違いを検討する」とは、技術に対する考え方を深めるとともに、社会に存在する多様性を認める」といもつながるのではないだろうか。

註：

(1)『日本古典文学大辞典 簡約版』岩波書店、一九八六年

(2)『御伽草子』「浦島太郎」の本文は、『日本古典文学大系』岩波書店、一九五八年

を参考しつゝ、教科書テキストとして学生の分かりやすさに配慮して、適宜表記を改めたり送り仮名を補つたりした。

(3)古典作品を読む上で基礎となる助動詞「き」「けり」「す」「ぬ」が用いられ、「ぬ」の識別を説明できる要素が盛り込まれている点も、教材として有意義である。

(4)浦島伝説の変遷については、三浦佑之『浦島太郎の文学史 恋愛小説の発生』五柳書院、一九八九年、林晃平『浦島伝説の研究』おうふ、一〇〇一年、三舟隆之『浦島太郎の日本史』吉川弘文館、二〇〇九年などが詳しい。

(5)各年度一年生約一七〇名(一クラス四十名強×四クラス)で、三年間の後期期末試験受験者は五〇五名であった。

(6)一クラス目に授業を行った際には、欄外で会話すれば良いと考へ、そう指示した。しかし、それでは見にくくなると考えた一グループで「会話用」ページを独自に作成し始めた。確かにこれは良い考えと思い、二クラス目では授業担当者が各グループに「会話用」ページを設けたといふ、なかなかスムーズな会話や作業に発展せず、それぞれ任せられた担当の作業を淡々と進めるグループが多かつた。もちろんクラスの雰囲気によるところもあり、一概には言えないが、三クラス目・四クラス目は、会話の仕方について提示だけで、方法は学生に任せたといふ、学生が試行錯誤しながらグループで作業を進めていく姿が多く見られた。

(2020. 12. 11 著)

A report on Japanese classic class comparing various Urashima legends:

The practice of face-to-face classes and remote classes

Midori OGITA*

*Corresponding author: m.ogita@maiizuru-ct.ac.jp

Abstract: This paper reports on practices of Japanese classic classes that compare aspects of acceptance of the Urashima legend. It is based on three years of face-to-face classes from 2017 to 2019 and remote classes in 2020. The purpose of this paper to review the meaning of Japanese classic classes and to show the possibility in remote classes.

Key words: Urashima legend, Japanese classic class, group work, class practice, remote classes

行っていた。これは梶井基次郎『樽櫻』に関して、グループごとに設問を与える意見を出し合い、グループワークの説明をしたところ、学生から、自分たちで Teams の会議を開いて話し合いをして良いか質問があった。各グループに任せる伝説の会議を開き、ほとんどのグループが会議を開き、メンバーの一人が OneNote の画面を共有して話し合いが行われていった。三年生はグループを九つに分けたが、通信環境としてはそれほど問題なくスムーズにグループワークが行われていたように思われる。確かに三年生は見知った者同士であること、高専三年目で、専門科目でも Teams での授業が行われているようである程度の慣れがあった。だが、一年生でもきちんと説明を行えば、同様の方法で話し合いが行えたのではないかと考えている。三年生よりも十分な準備と説明が必要であろうが、端から一年生には難しいと、可能性の幅を狭める必要はなかつたのではないか。

改善策の二つ目は、OneNote ではなく Excel を利用した作業シートである。Excel は自由に書き込みにくいこと、誰が書き込んだかわかりにくいことを理由に、本グループワークにはふさわしくないと考えていた。しかし、OneNote でグループワークを行ってみて、以下三点により、Excel の方がこのグループワークに関するでは、作業しやすいのではないかと考へた。

第一に、「変更履歴の記録」である。変更履歴の記録を行うことで、当該セルを更新した人が分かるようになる。さらに、図 4 のように、一つの項目や設問に對し、メンバーそれぞれの意見を書き込むセル、最終的に採用した意見を書き込むセルを設ければ、一つのセルに同時に複数人が書き込もうとして更新に不具合が出る危険性を防ぐことができるだろう。

項目	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	最終意見
①浦島太郎の名						
②浦島太郎の住んでいた所						
③浦島太郎の特徴						
④亀の特徴						
⑤女性の名称。特徴。						

図 4 Excel ファイルを用いた「構成シート」例

第二に、Excel では共同作業を行う上で「チャット機能」が使える点である。この機能だと、回答するセルと会話が別の次元に存在することになるため、同じ画面上で閲覧することが可能ながらも見にくさが軽減され、コメントがあつたことにも気づきやすい。別シートで他グループが作業していくても問題ないのか、チャット機能を使うならグループごとに別のファイルを作成する必要があるのか等、授業で行うためには試験運用して確認すべき点があるだろうが、選択肢の一つには加えておきたい。

第三に、一覧する「比較表」を作りやすい点である。今回は、OneNote に書き込まれた学生の回答を、授業担当者が新たに作成した Excel の表にコピー & ペーストして、他の作品と一覧できる「比較表」を作成し、Teams 上で学生に見せながら解説していた。しかし、学生の回答を移行すると、一度手間な作業が発生している。同じファイルのシート内で別グループが作業できる体制が取れるなら、採用意見を紐づけした集計用のシートを作成しておくだけで、一覧の「比較表」を作成することができる。別のファイルを作成する必要がある場合にも、同じ Excel ファイルであるため、作業シート自体を移行し、関数を当てはめれば、作業はしやすいはずである。

以上のように、Teams を併用して、あるいは Excel を利用したグループワークを提起した。この方法を成功させるためには、グループワークを行う上で丁寧な説明と下準備が必要になる。高専機構では、学生、教職員ともに Microsoft 365 のアカウントが割り当てられ、Microsoft の各種アプリケーションを利用できる環境にある。加えて、舞鶴高専では遠隔授業の基礎となる資料や動画の公開を Moodle2 を通して行っている。利用できるツールの長所と短所を理解し、吟味し続けることで、オンラインでも対面に劣らない授業を展開できる可能性を持っている。

6・おわりに

浦島伝説の受容に関してグループワークの授業実践と、遠隔授業における試みや改善策を紹介してきた。浦島伝説は馴染み深く、古典に苦手意識を持つている学生でも読める難易度であり、グループワークを行うことで、一人では難しい箇所も協力して意見を出し合うことで考えが深まる教材である。歴史書、和歌、歌論書、説話、謡曲という多様なジャンルの作品に触れる機会にもなる。それぞれが影響し合い、幅広い享受者層によって、読み継がれてきたことを実

翌週は Teams にアクセスさせ、「」の表を見せながら、表の抜けている所や誤つてある所、注目してほしい部分を、時にはグループの担当者を当てて答えさせながら解説を行つた。各クラスで作られた表をもとに解説することで、自身の解答を答え合わせすることになると考えてのことであった。

学生には、比較表を見たり解説を聞いたりして、(1) 様々な浦島伝説を比較して、気づいたことや考えたこと（三百字以上）、また、グループワークを行つてみての(2)通信トラブルの有無や(3)意見交換の有無、(4)感想を入力し提出させた。

このうち、(2)と(3)の結果を下の図3に示した。(2)通信トラブルの有無については、「あつた」「ときどき」と回答した学生は約三十五パーセントに上るが、感想を読むと「一人で考えるより楽しかった」などと好意的な意見が多くつた。(3)意見交換の有無については、約七十三パーセントの学生が「できた」「それなりにでききた」と回答した。「でき

(3) 意見交換や話し合いはできましたか？

(2) 通信上のトラブルはありましたか？

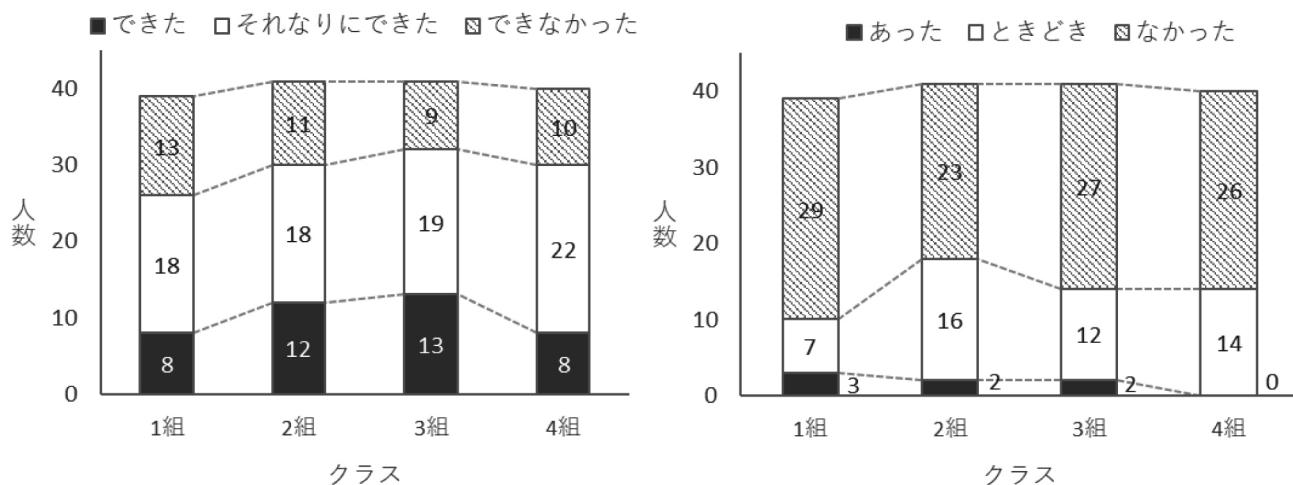


図3 グループワークを終えてのアンケート結果 ((2)・(3))

5・3 課題と改善策

遠隔授業で行つたグループワークにおいて、先述したように、ソフトの選択に関して検討が必要である。OneNote は自由に書き込みやすい反面、会話をしようとしたときに流れが分かりにくく、煩雑になる。「会話用」ページを設けても、別のページの項目や設問についての話題であるため、同時にそのページを見ながら会話を進めることができない。また、別のページを閲覧しているときに、他者が書き込んでも気づくことができない。

改善策として二点挙げる。一つ目は、Teams を併用することである。対面したことのない一年生同士であり、会話が弾むか未知数であること、同時に二つのソフトを利用すると難易度が上がるのではないかと考え、今回はすべて OneNote 上で文字のみの会話を勧めた。しかし、文字入力に慣れていない学生や、文字だけの会話に限界を感じている学生がいた。また、OneNote での会話の難しさから、自主的にグループ LINE を作成し、会話はそちらで始めてしまつたグループもあつた。こうなると、授業中にもかかわらず、学生の考える過程を教員が把握しづらくなる。このように OneNote をチャット替わりにすることは限界があるようと思われた。

実は三年生の総合国語の授業で、同様に OneNote を用いてグループワークを

なった」と回答した学生は、「もし次の機会があつたらもっと積極的に頑張りたい。」「難しいところもあつたけれど、新鮮で楽しかったです。」などと感想を書いており、前向きなものであつた。こちらの指示や仕組みづくりによつて、改善の余地はあるだろう。

反省点は、学生に発表してもらう形式ではなく、授業担当者が大部分を解説するだけの授業になってしまったことである。敢えて同時双方向型にしなくても、オンデマンド型で動画を公開する方が学生は自由に止めたり繰り返したりしながら聴くことができ、ふさわしかつたのではないかと考える。各クラスで学生の回答をもとに比較表を作り、動画を作成するとなると、かなりの時間と労力がかかるが、クラス単位ではなく、学年全体として気になる点をピックアップして解説するなど、工夫できる。

加えて、OneNote にこだわる必要がなかつたのではと考え始めている。OneNote は自由な位置にコメントを書き込めるなどを魅力として今回のグループワークのソフトに選択した。しかし、比較表を作成した方が一覧できて分かりやすい。これは改善策として後述する。

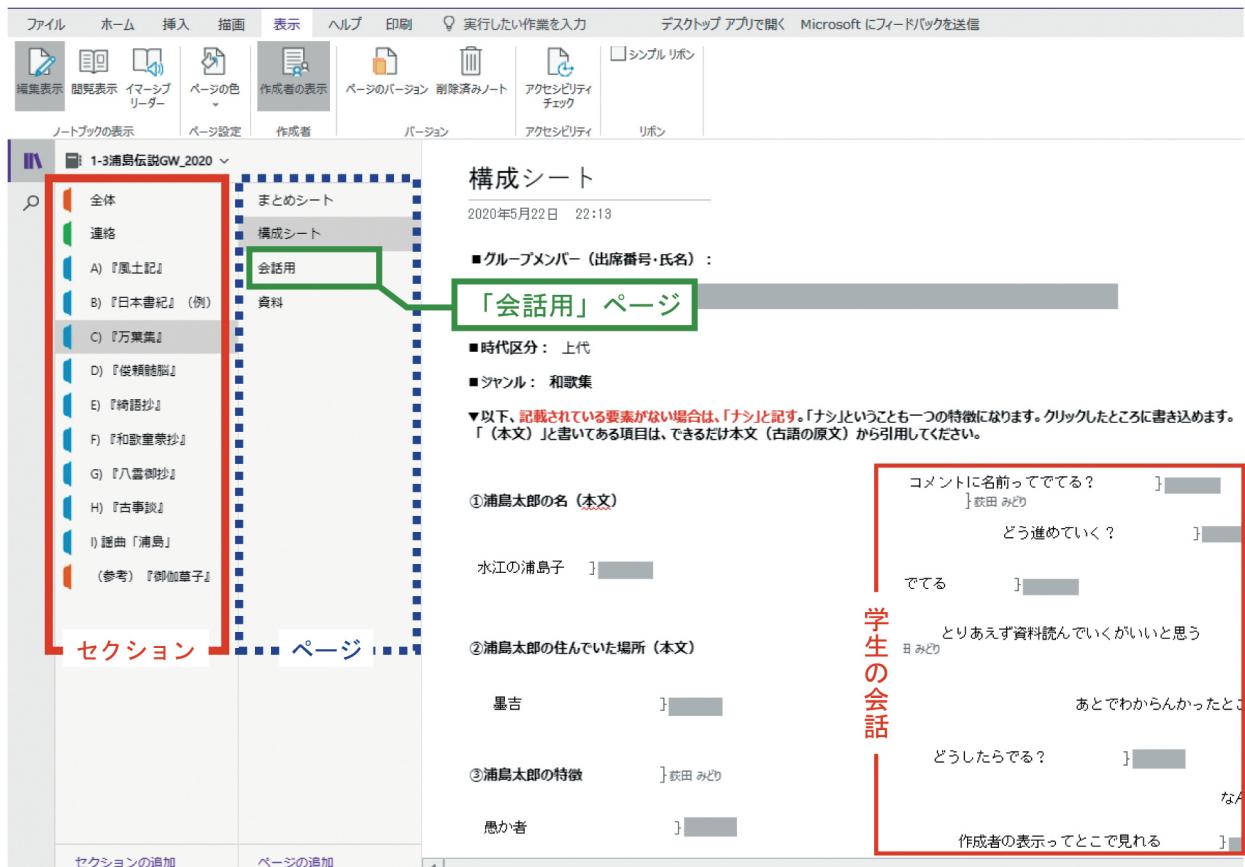


図2 「構成シート」画面の様子 ※学生の個人名はグレーで塗りつぶしている。

れ自分の担当の範囲をこなすグループもあった。「自分の担当範囲以外も積極的に意見を出し、協力しながら、グループが担当した作品を読み取りましょう。」という指示を出してはいたものの、話しかけにくい雰囲気を作ってしまっていた。

第四回授業終了後に提出してもらったアンケート（感想）からは、学生たちが制限された中で行う初めてのグループワークに戸惑いながらも、まだ対面していないクラスメイトとの交流に新鮮味と面白さを見出していたことが窺える。一方で、交流がなかつたグループの学生からは、個人作業になつてしまつたことを残念がつている様子が見て取れた。話したことのないクラスメイトに対し、自分から声をかける勇気が出ず、交流できなかつた学生の中には、会話して進めざるを得ない状況になれば交流を楽しめたかもしれない者もいる。そうした学生のコミュニケーションの可能性をつぶしてしまつたことは反省点である。上の図2はあるグループの「構成シート」の様子である。当初、学生たちは欄外で会話をし、相談しながら項目を埋めていっていた。その後、会話と解答者が見づらくなってきたよう、新たに「会話用」ページを作成し、そのページで会話するようになった。

授業担当者からは、欄外で会話し、その過程を残しておいて良いが、必要に応じて自分たちで「会話用」ページを作つても良いと提案する形をとつた。四クラスで授業を行つてみて、授業担当者が「会話用」ページを作ると、そのページで会話しなければならないという義務感が生まれ、スムーズな会話をしくそな印象を受けたためである。作業ページと会話ページが分かれていると、コメントが追加されても気づきにくく、会話が成立しにくいのである⁽⁶⁾。それゆえ、授業担当者はこういうことができるという提示をするだけにとどめ、グループ内でどのように会話を進めるかは学生に任せることにした。アンケートでは、意見交換や話し合いの有無はクラスによりそれほど差がなかつたので、もしかしたらクラスの雰囲気による違いなのかもしれない。ただ、この方法で授業を進めたクラスでは、学生の相談し合いが活発だったように思われた。

5・2 発表と解説

学生が取り組んだ「構成シート」は、それぞれのページに分かれているため、他作品との比較がしにくい。授業担当者は、翌週までに「比較表」の形で学生の回答を一覧できる表を用意した。これはExcelによって作成し、「全体」というセクションに貼り付けた。

ベースとなる一つの話が様々な時代や地域で語りつがれてゆき、それぞれの話をよむと時代背景や地域性などが見え、またそれらを比べることに興味を持ったから。

浦島太郎の見方が大きく変わったので、最も印象に残っています。

(二〇一八年度)

高校になつてからおとぎ話をくわしくやるとは思つてなかつた。実際いろんな浦島物語があつて考察することが楽しく、小さいころに読んだ話とまつたく違つたり、おじいさんにならないパターンもあるのか、と終始樂しかつた。

(二〇一九年度)

子どもの頃から読んでいた話であつて親しみがあつたが、様々な展開の話があることを知つて驚いた。いろんな時代で内容の違う浦島太郎が書かれていることは多くの人に好かれていた作品なんだなど感じた。

(二〇一九年度)

もともと知つてはいた物語だったが、授業を通して、浦島太郎の住むところについてなど知らなかつたことがあって、面白く感じた。そしてグループワークでも内容を深められ、様々な書物の浦島太郎に興味を持つた。

(二〇一九年度)

グループワークと、その前段階として読んだ『御伽草子』「浦島太郎」を通して、学生たちにとつてこれまで「当たり前」だつたものを突き崩し、深く考える機会にできたのではないだろうか。後期に行つた授業の単元の方がどうしても印象が強い中で、三年間で約八パーセントの学生が一年の最初の授業を一年後の感想に書くほどに記憶に残せたことは、十分に意義深いと考えている。

5・遠隔授業におけるグループワークの試み

二〇二〇年、新型コロナウイルスの影響により、本校では四月中は休校、ゴルデンウイーク明けから遠隔授業を開始した。六月から学年単位で段階的に対面授業を再開し、一年生の遠隔授業は六月下旬まで続いた。浦島伝説に関するグループワークは、遠隔授業全六回のうち、第三回・第四回で行つた。第三回は対面授業での読解作業(グループワーク)にあたる部分、第四回は発表にあたる部分である。発表の代わりに授業担当者が解説を行い、適宜学生を当てる形をとつた。以下、読解作業と発表解説の手順について説明し、見えてきた反省点と改善策を示す。

5・1 読解作業

まず、第三回の読解作業について説明する。本校では、ショートホームルーム(SHR)はMicrosoft Teamsを用いて行つてはいるものの、学生のインターネット環境が科目担当者に周知されておらず、長時間の同時双方指向型での授業は専門科目以外ではあまり行われていないようであつた。データ通信量、通信速度の問題があり、長時間のアクセスが必要なグループワークは避ける方が無難だと思われた。その上、一年生はまだ顔も合わせたことのない者同士であり、どこまでTeamsの会議機能を使って、双方向の話し合いができるかが不透明であった。これらの状況を踏まえて、今回はグループワークの説明をTeamsで行い、その後Microsoft OneNoteに移動し、文字でのやり取りを主としたグループワークを試みた。

OneNoteは一枚もののキャンバスのような形の入力画面で、クリックしたところに自由にコメントの書き込みができる。共有することで、同時に作業することができます、「作成者の表示」というボタンを押しておくと、誰が編集したコメントかが分かる。これにより、OneNote上で文字による話し合いができるのではないかと考えた。

OneNoteにはセクションとページという階層がある。複数のセクションを作成し、それぞれのセクションの中に複数のページを設置することができる。本グループワークでは、浦島伝説の記された作品①～⑤というセクションを作成し、それぞれのセクションに「構成シート」「まとめシート」というページを設置した(次頁図2)。「構成シート」は対面授業での「比較表」にあたる。あらかじめ①～⑪の分析項目を入力する欄を設けておいた(ただし、今回は⑤を「女性の名称。特徴。」と「浦島太郎との出会い」の二つに分け、①～⑫とした)。「まとめシート」は対面授業と同じ「まとめシート」の三つの設問を課した。

今回は、「構成シート」の①～⑥をAさん、「まとめシート」の設問1をBさん、……というように、グループの各メンバーに担当箇所を割り当てておいた。初めてのオンラインでのグループワークで、うまく会話しながら進められるかがわからなかつたためである。しかし、杞憂で、むしろ手を出し過ぎた感がある。グループワーク中、授業担当者は適宜各グループのページを巡回し、迷つてはいるような会話にはフォローのコメントを書き込むなどしていた。学生の様子を見ていると、担当を割り当てることで、やはり会話のないままそれぞ

学生の感想は、これまで当たり前だと思つていた浦島太郎の話が覆されたことへの驚きを感じているものが多く、自身が読み込んだ担当作品と他作品とを比較し、多くの違いが見えてくることに興味を持つてくれているようだった。一部を抜粋して示す。

時代が現代に近づくにつれ、引用や、話を飛ばすことが多くなっているので、浦島太郎の話が一般に広く知られていったことがわかる。

(二〇一七年度)

各作品は似ていてる点もあれば、まったく違うところもあり、自分が幼少期に何回も読み返していたこの童話が、こんなにも種類があるとは知らなかつたので、読んでみて、どの物語も新鮮でおもしろかった。

(二〇一七年度)

他と比較すると一つ一つ物語が大きく違つたり少しだけ違つたりもして、自分たちが知つてたのはほんの一部だけなんだと比較しながら思った。

(二〇一七年度)

浦島太郎本人の名前や玉手箱の中身まで、話によつて全く違つた事にとても驚きました。今の自分達がほとんど知つてゐる浦島太郎のお話が、つい二、三百年前までは、こんなにバラバラな形で伝わつていて驚きましたが、それと同時に統一された話以外はほとんど知らない事に少し悲しさも感じました。

(二〇一七年度)

これらの比較で、「比べる」ということにに対する見方が改められた気がする。

(二〇一七年度)

各作品で細かい部分が変わつてゐるのは人から人に伝わつていく過程で少しづつ変化していったからなのかなと考えた。しかし亀がいるいない等の大きな違いはどのようにして生まれたのだろうかと思う。

(二〇一八年度)

auのCMに出てくる浦ちゃんは、「風土記」に出てくる嶼子かと思いまし。理由は「風土記」の最後で嶼子は玉手箱を開けた後、泣きながら歩き回つて歌つたとなつていて、CMの方でも泣きながら歩き回つて「海の声」を歌つついて、また、歌詞が似てゐると思ったからです。

(二〇一八年度)

特に自分は作品による亀の違いが印象的でした。亀が出てこない作品もあれば、亀が乙女になる作品もあり、とても興味深かったです。

その他、上手に音読できる学生への賞賛や、今回のグループワークや発表に対する反省、今後発表があつたときには頑張りたいという抱負など、発表自体に対する感想もあつた。

『御伽草子』「浦島太郎」の読解も含めたこの授業が学生の思考に少なからず刺激を与えたことは、年度末に書いてもらつたコメントからも窺える。二〇一七年から二〇一九年までの後期期末試験において、一年間古典を学んだ中で特に印象に残つた単元とその理由を書かせた。浦島伝説は年度当初に行つた授業でありながら、二〇一七年度十五名、二〇一八年度十六名、二〇一九年度九名の計四十名が「浦島太郎（伝説）」と回答した⁽⁵⁾。この理由として、以下のようなことが書かれていた。

自分の知つてゐる事実がどんどんくつがえつていくところがおもしろかつたから。

(二〇一七年度)

小さい頃から誰しもが知つてゐるような話だが、この学習をした時、自分が知つてゐる「浦島太郎」とのずれがあつたのが興味深かつた。

(二〇一七年度)

グループワークを行つて、自分が知つてゐた浦島太郎とは違つたストーリーの浦島太郎を知れたり、浦島太郎という物語にいろいろな歴史があるということを知れたのが良い経験になつたから。

(二〇一七年度)

誰でも知つてゐるような有名な話だけど、地方によつて細部や根本的な部分が異なつており、自分の知らない浦島太郎が聞けたから。また、発祥場所から見たら、もしかしたら実在するのかもと考えながらグループワークをしたら楽しかつたから。

(二〇一八年度)

自分もこの丹後の出身であつて、浦島太郎という物語はおおまかに内容は知つてゐたが、詳しくは知らなかつた。それに、浦島太郎の物語に多くの種類があり、一つ一つ内容は似ていても、物のあらわし方が違うなど、とても興味深い授業だった。

(二〇一八年度)

(二〇一八年度)
文を読んでみて、調べてみて、内容の捉え方、見方が分かりづらいが、他の班の話だと、言葉遊びや時代の背景、浦島伝説のはなしから連想された話などが読みとれて、おもしろみがあると思い、聞いてたのしかつた。

(二〇一九年度)

設問2にある「ジャンル」は「比較表」にあらかじめ提示している。どういふものであるかは学生に調べさせた。ジャンルを押さえることで、その文章全体がどのような意図で書かれているかを押さえ、その文章形式の中でどのように浦島伝説を表現しているか、ある程度の傾向がつかめると考える。

たとえば、『日本書紀』は「秋七月に、丹波国余社郡管川の人水江浦島子、舟に乗りて釣し、遂に大亀を得たり。」という一文で始まる三文のみの記事である。これは雄略天皇二十二年の「秋七月」のことであり、正史である『日本書紀』が天皇の時代に沿って編年体で書かれている形式に基づく。『万葉集』では長歌に反歌が付随していて、その様式を押さえる必要がある。歌論書は、和歌が一首取り上げられ、その和歌に対する解説として浦島伝説が記されている。そのため、浦島伝説のうち和歌に関わるくだりは詳しく述べ、和歌に関わらない部分は省略するなど、歌論書であるがゆえの語り方の特徴がある。

3・4 発表の方法

発表する内容は以下の通り指示した。

- ① 比較表を黒板に示す。
 - ② 本文音読とともに、違いについて論点をまとめて発表する。
- *どのように発表するか、音読する係、論点を発表する係など分担を決めても可。音読は複数人で読むのも可。
- *グループ内の全員が何かしらの役割を受け持つこと。

「比較表」を黒板に示すことは、割合時間がかかるため、三グループ程度一斉にチョークの色を変えて書かせ、その後一グループずつ発表する形式を取った。他グループの学生には、黒板に書かれたものを自分の「比較表」に書き写すよう指示した。それぞれの発表を聴いた上で、再度九作品+『御伽草子』を一覧し、比較して見えてくるものを考えてほしかったためである。勿論、誤りがあれば、発表後にこちらで指摘する。

音読を課すことにより、歴史的仮名遣いに慣れるだけでなく、文章の持つリズム感を感じができる。特に、『万葉集』や謡曲「浦島」はリズムが重要である。読めない言葉や分かりにくい言葉については、グループワーク中に巡回しながら適宜質問に答えた。古語辞典を引くことも推奨していたが、学生の持つ古語辞典には掲載されていないような難解な語句もあるためである。

4・学生の反応

学生には、他のグループの発表を聴いて感想を書くよう、用紙を配布した。自分の担当した作品を他の作品と比較してみて、気づいたことや考えたことなどを書き、発表終了後に提出させた。出てきた疑問点等は後日プリントに抜粋してまとめるなど、フィードバックを行っている。

さらに、スマートフォン等電子機器の使用を許可し、古語辞典にも掲載されていないような、竜宮城にあたる場所、「常世」や「蓬萊」がどのような場所なのかを調べる学生もいた。違いを分析しての発表については、多くが「まとめシート」を読み上げる形をとっていた。

五分間の発表後、授業担当者から数点質問を投げかけた。それにより、発表者が気づけなかった点や興味深い点についてフォローを加えた。テキストを読み込んでこそ分かるという点を重視した。歌論書では、和歌中の「あくる」が、箱を「開くる」と夜が「明くる」の掛詞になっているという説明を補うことが多かった。



図1 発表の様子

表2 浦島伝説比較表（すべて埋めた状態の例。明朝体部分II学生が書き込む欄）

時代区分	作品名	ジャンル	名	②浦島太郎の住んでいた所	①浦島太郎の名	③浦島太郎の特徴	④亀の特徴	⑤女性の名稱・特徴	⑥竜宮城の名稱・場所	た風景・人物	故郷に帰り見た	⑧地上での経過年数	身	称	⑨玉手箱の名	⑩玉手箱の中	⑪玉手箱を開けた後どうなったか	
上代	Ⓐ『風土記』	地誌	簡川の嶼子、水江の浦の嶼子	与謝の郡。日置の里。筒川村	①浦島太郎の名	②浦島太郎の住んでいた所	③浦島太郎の特徴	④亀の特徴	⑤女性の名稱・特徴	⑥竜宮城の名稱・場所	た風景・人物	故郷に帰り見た	⑧地上での経過年数	身	称	⑨玉手箱の名	⑩玉手箱の中	⑪玉手箱を開けた後どうなったか
中古	Ⓑ『日本書紀』	歴史書	丹波国余社郡管川水江浦嶋子	丹波国余社郡管川水江の浦島子	墨吉	水江の浦島子	和歌集	Ⓒ『万葉集』	♀。龜が化けた姿。	蓬萊山	「蓬萊山、仙都」	「蓬萊山、仙都」	「蓬萊山、仙都」	三百余歳	芳蘭之体	玉匣	女にもう会えないと悟る	⑪玉手箱を開けた後どうなったか
中世	Ⓓ『俊頬體脳』	歌論書	島みづの江の浦浦島の子	島みづの江の浦浦島の子	島みづの江の浦浦島の子	浦島の江	歌論書	Ⓔ『綺語抄』	♀。龜が変身す	蓬萊山	「蓬萊山、仙都」	「蓬萊山、仙都」	「蓬萊山、仙都」	四五百年	白雲	玉櫛筈	娘が寄り、死んでしまつた	⑪玉手箱を開けた後どうなったか
中世	Ⓕ『和歌童蒙抄』	歌論書	丹後国余佐郡水江浦嶋子	丹後国余佐郡水江浦嶋子	丹後国余佐郡水江浦嶋子	浦島の江	歌論書	Ⓖ『八雲御抄』	♀。龜が変身す	蓬萊山	「蓬萊山、仙都」	「蓬萊山、仙都」	「蓬萊山、仙都」	三百四十八年	紫の雲	玉匣	老いかがまり、物も忘れてし	⑪玉手箱を開けた後どうなったか
中世	Ⓗ『古事談』	説話集	浦島の子	浦島の子	浦島の子	浦島の明神	謡曲	Ⓘ『浦島』	♀。龜が変身す	蓬萊山	「蓬萊山、仙都」	「蓬萊山、仙都」	「蓬萊山、仙都」	七百年以上	箱、玉手箱	箱	老大すみに至りて行ひか	⑪玉手箱を開けた後どうなったか
中世～近世	浦島太郎	御伽草子	浦島太郎	浦島太郎	浦島太郎	浦島太郎	御伽草子	浦島太郎	「美しき女房」	龍宮城	「虎ふす野辺」「八十ばかりの翁」	翁の姿	七百年以上	ぢ「紫の雲三す」	「玉手箱」	翁の姿	翁の姿	翁の姿

- Ⓐ『風土記』丹後国逸文（『新編日本古典文学全集』小学館、現代語訳・頭注付き）
奈良時代初期、元明天皇（在位七〇七—七一五）の詔により各令制国の國府が編纂した地誌。主に漢文体で書かれた。
- Ⓑ『日本書紀』（『新編日本古典文学全集』小学館、現代語訳・頭注付き）
現存最古の正史。舍人親王らにより、七二〇年成立。原文は漢文だが、テキストは漢字仮名交じりになっているものを使用した。
- Ⓒ『万葉集』（『新編日本古典文学全集』小学館、現代語訳・頭注付き）
現存最古の和歌集。七五九年以後成立。天皇、貴族から下級官人、防人など様々な身分の人が詠んだ歌4500首以上が所収。原文は万葉仮名。
- Ⓓ『俊頬韻脳』（『日本歌学大系』風間書房）
源俊頬によって書かれた歌論書。一一一三年頃成立。
- Ⓔ『綺語抄』（『日本歌学大系』風間書房）
藤原仲実によって書かれた歌論書。一一〇七〇一一六年頃成立。
- Ⓕ『和歌童蒙抄』（『日本歌学大系』風間書房）
藤原範兼によつて書かれた歌論書。一一四五頃成立。
- Ⓖ『八雲御抄』（『日本歌学大系』風間書房）
順徳天皇が著した歌論書。鎌倉初期成立。
- Ⓗ『古事談』（『新日本古典文学大系』岩波書店）
説話集。源顥兼編纂。鎌倉時代初期の一一二二—一二一五年に成立。奈良時代から平安中期に至るまでの四六二の説話を収める。
- Ⓘ『謡曲「浦島」』（『謡曲三百五十番集』（『日本名著全集 江戸文藝之部 第二十九巻』）日本名著全集刊行會、二〇二〇年度の授業では私に現代語訳を付した）
作者不明。浦島伝説を題材にした創作。浦島明神参拝の勅命を受けた廷臣が、丹後の水江に赴く。
- Ⓐ①までの九作品を、九つのグループそれぞれに割り振り、担当を決定した。ただし、Ⓐ『風土記』は文章量が多く、Ⓑ『日本書紀』は少ないため、『日本書紀』を担当するグループには『風土記』の後半も担当してもらつた。遠隔授業を行つた二〇二〇年度の場合は、作品途中で分けることが難しく、どのようないい回答を求めていいのか例を見せる目的もあり、Ⓑ『日本書紀』を例として荻田が担当し、残り八作品を八グループに振り分けた。

3・3 分析項目

各人に「比較表」を、各グループに「まとめシート」を配布した。「比較表」は、上記九作品に、比較対象として『御伽草子』を加えた十作品において、次の十一項目のプロットを書き込み一覧できるようにした表である（次頁表2）。

①時代区分（事前に学習した上代・中古・中世・近世という時代区分を意識させる）

- ①浦島太郎の名
- ②浦島太郎の住んでいた所
- ③浦島太郎の特徴
- ④亀の特徴
- ⑤女性の名称。特徴。浦島太郎との出会い（二〇二〇年度は「浦島太郎との出会い」を別項目に分けた）
- ⑥竜宮城の名称。場所。
- ⑦浦島太郎が故郷に帰り見た風景・人物
- ⑧地上での経過年数
- ⑨玉手箱の名称
- ⑩玉手箱の中身
- ⑪玉手箱を開けた後どうなつたか

学生は自身の担当作品を読み取り、「比較表」の①～⑪の項目にあてはまる内容を書き込み埋めていく。①②などは抜き出して書くことになるが、③⑦などは現代語で書いても構わない。文中に描かれていない項目については、その欄に斜線を引くよう指示した。「描かれていない」ということも特徴の一つであると伝えている。

一方、「まとめシート」には三つの設問を示し、話し合つてもらつた。

1. 表において、現在よく知られている「浦島太郎」や『御伽草子』との最も特徴的な違いはどのような点か。
2. この作品のジャンルはどのような文章形式か。その特徴はどのような所
- に表れているか。

3. 表以外の箇所で、特徴的なプロット（筋立て、文章の流れ）・表現はどういう点か。

表1 授業の流れ（前期中間試験まで）

	前半	後半
第一回	授業ガイダンス、仮名遣い、辞書の引き方	『御伽草子』文学史、音読、本文
第二回	小テスト、言葉の単位、活用形	写す、語句の意味調べ
第三回	小テスト、四段・上下二段活用	『御伽草子』「浦島太郎」冒頭
第四回	小テスト、上下一段・変格活用	『御伽草子』「浦島太郎」冒頭
第五回	小テスト、グループ発表	グループワーク
第六回	小テスト、グループ発表（残り）	別単元
第七回		

大坂の渋川清右衛門によつてそのうち二十三編が選ばれて出版されたものを指す。二十三編の中には、「一寸法師」や「鉢かつぎ」など、昔話としてよく知られた話もあり、「浦島太郎」もその一編である。この出版により、「浦島太郎」はより広範囲に共通の話が広まつた。

ただし、これは我々が現在知る浦島太郎と、相違点も多い。たとえば、書き出しは「昔、丹後国に、浦島といふ者侍りしに、その子に浦島太郎と申して、年のはひ二十四の男ありけり。」⁽²⁾とある。「丹後国」という具体的な地名が記され、浦島という者がいてその子が浦島太郎であるというように、親の説明から入る点も異なる。さらに、二十四、五歳という浦島太郎の年齢まで明らかにされる。その後の筋立てでは、浦島太郎が亀を釣り上げ、放してやることについて恩を感じろと言い放つ。いじめられている亀を助けたわけでもなく、亀の背に乗つて竜宮城へ行く流れでもなく、翌日小船に揺られた女が浦島太郎のもとにやって来る。『御伽草子』は比較的簡便な文章で書かれているため、現代よく知られる話との違いを実感することができ、古典授業の導入として適当である⁽³⁾。

現在よく知られた「浦島太郎」は、国定教科書の影響によるところが大きい。全国一律の国定教科書に掲載されたことで、共通の「浦島太郎」が広まることがになった。明治三十七年（一九〇四）の第一期には冒頭の簡単なあらすじのみ記され、明治四十三年（一九一〇）の第二期から、検定教科書へ変わる直前の第六期国定教科書まで、小学二年生用の『尋常小学校読本』で用いられ続いている⁽⁴⁾。現代の我々が共通の浦島太郎の話を認識しているのも、この影響下に

ある。「へ々浦島は助けた亀に連れられて」と謡った文部省唱歌の存在も大きい。これらの受容の流れの概略については、グループワークまでにプリントを配布して押さえた。同時に、文学における時代区分（古代・中古・中世・近世・近代）についてもここで確認している。

最初の三回の授業で基礎を押さえた上で、文章を詳しく読み解き、違いに注目できる術を学び、第四回でグループワーク、第五～六回前半で発表を行う。なお、第六回後半と第七回は年度によって異なる作品を扱つた。

3・1 グループワークの目的

次にグループワーク・発表の内容と目的を説明する。グループワークは、グループごとに担当作品を決め、各時代の浦島伝説を比較分析するものである。発表では、本文を音読し、分析結果を説明する。

目的是、大きく二点である。第一に、古典授業の導入として、歴史的仮名遣いに慣れることがある。そのため、発表時に音読を課している。第二に、比較することで見えてくる「受容のかたち」を考えることである。グループワークでは、それぞれの作品同士、あるいは、我々がよく知る「浦島太郎」や江戸時代に出版されて以降広く伝わっていた『御伽草子』「浦島太郎」との違いを分析し、そこから見えてくるそれぞれの作品の特質を確認する。テキストを読み込み比較することによる気づきの重要性を感じられれば、今後の古典授業の取り組み方にも良い影響を与えると考える。他の教科にも通じる分析能力を養うことにもつながる。

なお、グループワークにすることで、古典に苦手意識を持つ学生たちも相談し合い、ここまで授業内容の復習を行なながら取り組むことができるほか、比較分析に関して、多様な視点を共有し合うことができる効果を期待した。

3・2 作品選定

グループワークにあたつて、以下のⒶ～①の九つの作品を選定した。作品名と概略、使用テキストを示す。一年生でもある程度読みやすく、違いを比較しやすいものであることを重視した。ただし、浦島伝説の受容の系譜を押さえる上で外せないと考えるもののうち、文章量が多く馴染みのない言葉が多いものについては、現代語訳付きのテキストを配布した。

浦島伝説の系譜を比較する古典授業

——対面授業と遠隔授業の実践を通して——

荻田みどり¹

要旨：本稿では、浦島伝説の受容の様相を比較する古典の授業実践について報告する。一〇一九年までの三年間の対面授業、一〇一〇年の遠隔授業に基づき、古典授業の意義を見直すとともに、遠隔授業における実践の可能性を示す。

キーワード：浦島伝説、古典授業、グループワーク、遠隔授業

1・はじめに

浦島伝説は、古くは奈良時代に成立した『丹後国風土記』逸文などに記事があり、舞鶴工業高等専門学校（以下、本校）の位置する丹後国にゆかりのある伝説である。『源氏物語』や『平家物語』にも浦島伝説を踏まえた表現が見られるほか、説話や歌論書などのテキスト作品はもとより、能や歌舞伎という舞台芸能に取り入れられるなど、現代に至るまでさまざまな形で受容されてきた。

近年では、KDDI株式会社のコンシューマ事業ブランドauのCMキャラクターとして登場している。これほど古くから多岐にわたるジャンルに波及して、

絶えず受容されてきた作品は、実は珍しい。

執筆者は、二〇一七年から二〇一九年までの三年間に、本校一年生を対象とした古典の授業において、浦島伝説の記されたテキストを比較するグループワークを実施してきた。古典がいかに現代まで形を変えながら受け継がれてきて、現代でも創作の糧になつているかを知ることは、入学したばかりである一年生が古典学習の意義を理解することにもつながる。その上、本校は京都府内だけでなく、滋賀県や兵庫県、大阪府など、他府県から入学してきた学生も多い。舞鶴のことについてあまり知らない学生にとっても、これから五年間を過ごす舞鶴という土地について興味を持つ良い機会になると考える。本稿では、古典授業の導入として位置付けたこの授業の取り組みを紹介する。

また、二〇二〇年度は新型コロナウイルスの影響により、本校では六月まで

遠隔授業を余儀なくされた。そこで、Microsoft OneNote や Teams を用いて、同様のグループワークを試みた。一度も対面したことのない、パソコンの操作に慣れていないかもしれない一年生に対して、どのような方法が取れるか試行錯誤した取り組みの方法と課題を述べる。

2・授業の流れと浦島伝説の概要

まず、浦島伝説に関する授業の流れを説明する。浦島伝説に関する授業は前期第一回授業より一授業時間九十分×全約五回半で実施している。次頁の表1に前期中間試験まで七回分の概要を示した。

最初の三回は一授業時間を大きく二つに分けて進めた。前半は授業のガイドンスや小テスト、古典文法の基礎知識等の説明、後半は『御伽草子』所収「浦島太郎」の冒頭部分の読み解きを通して、現代語訳の仕方や、前半の学習内容を活用しつつ現代語訳をする上で重要な文法の説明を、講義形式で行った。

「御伽草子」は、広義には室町時代から江戸時代初期にかけて作られた短篇の物語の総称を指す。平安時代以降作られた物語文学よりは庶民などにまで広く流布し、その数は五百編にも及ぶという¹。狭義としては、江戸時代中期、